お茶の水女子大学リベラルアーツとＦＤ公開シンポジウム

平成 20 年9月 17 日（水）

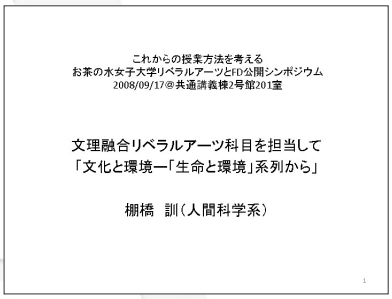
文理融合リベラルアーツ科目を担当して ―担当教員によるパネル討議―

文化と環境（「生命と環境」系列から）

パネラー 棚橋 訓（人間文化創成科学研究科人間科学系教授）

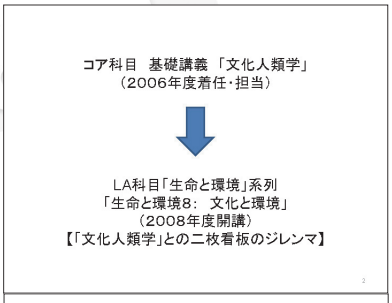
ただ今ご紹介にあずかりました棚橋でございます。大学院では人間科学系の所属で、教育の担当はジェンダー系です。学部の方では文教育の教育科学コースに属しております。

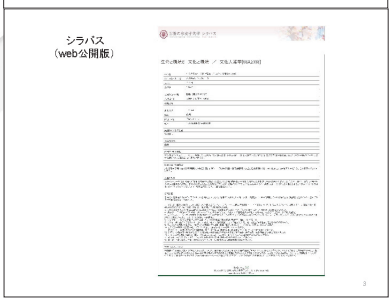
今日は、2008 年度前期に担当した生命と環境系列の「文化と環境」を実施してということで、お話し申し上げたいと思います。お手元には両面印刷３枚のハンドアウトがございますが、最初の3ページは、これからお見せするスライドのハンドアウトです。残りの２ページは、ウェブで公開したこの授業のシラバスをそのまま打ち出しています。最終ページは、今年度の前期の定期試験期間中に行いました試験問題です。公開してはいけないところは略してありますが、問題で出ているところは、受講生にも事前に公開したところですので、支障はございません。ご安心ください。それでは簡単にお話し申し上げてまいります。



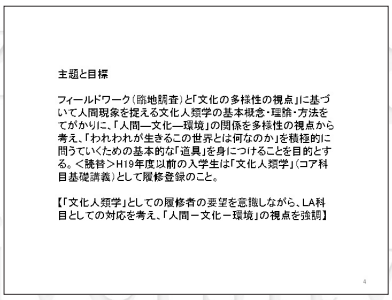
私はもともとコア科目基礎講義の「文化人類学」を担当しておりました。専門は文化人類学で、南太平洋地域の研究をしております。お茶大に着任したのは 2006 年４月ですので、そこから基礎講義、俗にいう「般教（一般教養）」の授業の担当をしてまいりました。その後、2008 年度からＬＡ科目に鞍替えをするというので、生命と環境系列で開講してほしいという要請があったわけです。

それぞれＬＡ科目のご担当の先生方は個別の事情もお抱えかと思いますけれども、私の場合には、旧来の般教ではディシプリン型の「文化人類学」という授業を担当していて、それが 2008 年度前期からは「生命と環境」の中の「文化と環境」というテーマ型の教養科目に変わったわけです。なおかつ 2007 年度以前にこの大学で学籍を得ている学生は、「文化人類学」として履修をしてまいりますので、授業の実施においてはディシプリン型とトピック型との二枚看板のジレンマを抱えることになりました。





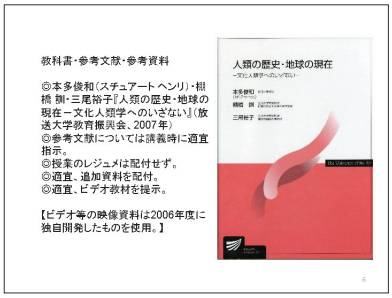
ほぼこのシラバスどおりに授業は実施できましたので、それに沿ってお話をしてまいります。まず主題と目標です。この授業は「文化人類学」としての履修者がかなりいます。それから事前アンケートといいましょうか、４月の初回授業時のアンケートでも分かったのですが、「文化人類学」の単品の科目として履修したいという学生の希望が高いようでしたので、「文化人類学」としての履修者の要望を意識しながら、ＬＡ科目としての対応を考えることになりました。そうした事情のなかで「文化人類学」というディシプリン型の教養科目としてだけではなく、「文化と環境」としての対応をしていくということで、「人間―文化―環境」という３すくみの関係を柱に据える形で授業を行いました。



授業計画ですが、どういう流れで事をたくらんだかといいますと、「人間―文化―環境」というその３すくみをめぐって、基本的な人間の行動をユニットとして取り上げていこうということです。「うむ」「うまれる」「まなぶ」「つくる・つかう」「そだつ」「つながる」「つどう」「うごく」「あらそう」「きりひらく」「きずく」「いやす」「まつる」。こうした人間の行動をユニットあるいはトピックにして取り上げて、授業計画を練るということで基盤を作って実施いたしました。

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

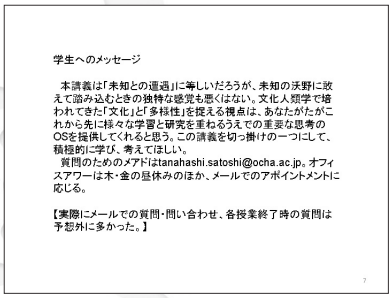
教科書・参考文献・参考資料ですが、基本的にこの授業は教科書を使いました。「おまえ、印税稼ぎか」と言われるかもしれませんが、放送大学で客員を併任しておりまして、そこで広く一般教養向けの授業作成やカリキュラム作成を並行してやっておりましたので、そのときに作成したテキストを教科書に指定しました。それにプラスして、参考文献は講義時に適宜指示する形を取りました。教科書を指定しましたので、授業のレジュメは一切配布しませんでした。それから適宜、追加資料を配付しました。これは、統計資料であったり、オリジナルなドキュメントであったり、さまざまでした。



比較的多用したのがビデオ教材です。文化人類学という分野をベースにして、文化と環境の話をしますので、「行って・見て・感じて」という経験に基礎を置くところが大きなポイントになります。ですから、少なくともビデオのような二次的な存在ですけれども、受講者にはそのフィールドワークのリアルな面を見てもらいたいと思ったからです。ちなみにビデオ等の映像資料は 2006 年度に独自開発したものを使用しました。

ただし、そこで気をつけなければいけなかった点があります。もともと私がフィールドワークで調査に入るとき、記録のためにいろいろな映像を撮ります。従って版権はクリアする必要はないのですが、人間を映している場合には、肖像権の問題が生じてきます。人の顔が映っていますと、いろいろな次元で法的問題を起こす可能性が生じてきますので、その点が苦慮したところです。

シラバスの中には学生へのメッセージを書く欄があります。そこで強調したのは、この授業から「文化」の問題を考える視点と人間の「多様性」をとらえる視点を手に入れてほしいということです。私がキーワードだと思ってメッセージに入れた言葉に、「思考のＯＳを手に入れてほしい」ということがあります。それから質問のためのメールアドレスは公開して、オフィスアワーをセッティングし、ｅメールでのアポイントメントに応じる形を取りました。例年そうですが、予想以上にメールでの質問・問い合わせや、授業終了時の質問なども多かったという印象がありました。



細かな数字で恐縮ですが、これは 2008 年４月の「文化と環境」の初回時に、ＬＡ委員会の方で配布なさったアンケートの回答者属性の集計結果です。全体と「文化と環境」というのだけを取り出して比較しました。回収は 110 件ですが、後でお見せするように、最終的な履修者数は 180 人ほどです。アンケートの回収率は、履修者総数からいえば 60％ほどでしょうか。学部ごとの分布を見ますと、全体から見れば、文教育学部と生活科学部の履修者の割合が高く、理学部の履修者の割合が低い傾向をもっています。

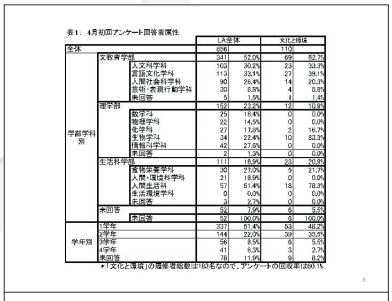


表1：4月初回アンケート回答者属性

			LA受講		文化と環境	
全体			286		110	
学部学科別	文教育学部		341	52.0%	69	62.7%
		人文科学科	160	30.2%	23	33.3%
		言語文化学科	113	33.1%	27	39.1%
		人間行動科学科	90	26.4%	14	20.3%
		音楽・表現行動学科	30	8.8%	4	5.8%
		未回答	5	1.5%	1	1.4%
	理学部		198	23.2%	12	10.9%
		数学科	25	18.4%	0	0.0%
		情報学科	22	14.0%	0	0.0%
		化学科	27	17.0%	2	16.7%
		生物学科	34	22.4%	10	83.3%
		種智院学科	42	27.9%	0	0.0%
		未回答	2	1.3%	0	0.0%
	生活科学部		111	18.9%	23	20.9%
		食物栄養学科	30	27.0%	5	21.7%
		人間・環境科学科	21	18.9%	0	0.0%
		人間生活科	57	51.4%	18	78.3%
		生活環境学科	3	6.0%	0	0.0%
		未回答	2	2.7%	0	0.0%
	未回答		52	7.9%	6	5.5%
		未回答	52	100.0%	6	100.0%
学年別	1学年		337	51.4%	52	46.2%
	2学年		144	22.0%	39	35.0%
	3学年		56	8.5%	6	5.5%
	4学年		41	6.3%	3	2.7%
	未回答		78	11.9%	9	8.2%

＊「文化と環境」の履修者総数は183名なので、アンケートの回収率は60.1%

同じく４月に行われた受講理由のアンケートの集計結果です。私がかつて頂いた資料は総数が 110 人でしたので、回答総数とは合わないのですが、複数回答が可能になっているのかなと思いました。ポイントは、「この授業科目の内容に興味がある」からというところと、「コア科目の単位が必要」だからというところに回答の山がありまして、「系列のテーマに関心があるから」というのは３番目の理由ですが、全体の 19％ほどの回答でした。こうしたことを前提に、初期の授業時間中に別途、受講者に尋ねたところでは、やはり「文化人類学」の科目として取りたいというような意見を言うものが多くありました。

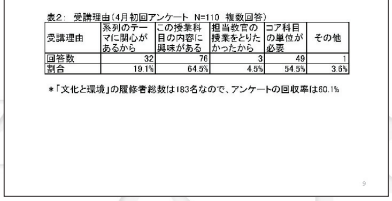


表2：受講理由（4月初回アンケート N=110 複数回答）

受講理由	系列のテーマに関心があるから	この授業科目の内容に興味がある	担当教官の授業をとりたかったから	コア科目の単位が必要	その他
回答数	32	76	3	49	1
割合	19.1%	64.5%	4.5%	54.5%	3.5%

＊「文化と環境」の履修者総数は183名なので、アンケートの回収率は60.1%

これはアンケートとは別に、履修登録者名簿から私が作成した履修者属性の表です。私がお茶大に着任してから３年度目ですので、過去３年度分です。2006 年度、2007 年度は「文化人類学」としての開講、2008 年度は「文化と環境」としての開講です。履修者数は、176 人、227 人、今年度が 183 人と上がったり下がったりという状況です。表にあるカッコ内の数字は、最終的に試験を受けて単位を取得した者の数です。その傾向は過去３年間あまり変わらないように思います。

ただし、履修者属性の中でセルに色をかけてあるところがありますが、そこが 2007 年度以前と 2008 年度の履修者属性の大きな傾向の違いです。一つは文教育学部１年生の履修者が減りました。また、理学部２年生の履修者が減りました。４年生も減っています。さらに、生活科学部２年生の履修者が減りました。その一方で、生活科学部１年生の履修者が大きく増えました。これがＬＡ科目の系列に入ったことの影響の一つかもしれないという推測はできます。

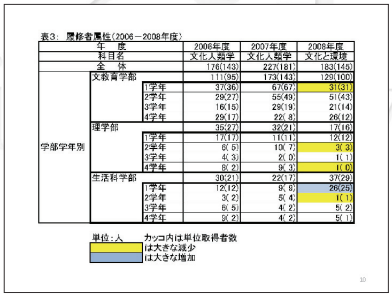


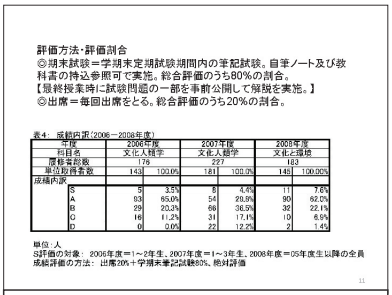
表3：履修者属性（2006－2008年度）

年度			2006年度	2007年度	2008年度
科目名			文化人類学	文化人類学	文化と環境
全体			176(143)	227(181)	183(145)
学部学年別	文教育学部		111(95)	173(143)	129(100)
		1学年	37(36)	67(67)	31(31)
		2学年	29(27)	55(49)	51(43)
		3学年	16(15)	29(19)	21(14)
		4学年	25(17)	22(8)	26(12)
	理学部		35(27)	32(21)	17(16)
		1学年	17(17)	11(11)	12(12)
		2学年	6(5)	10(7)	3(3)
		3学年	4(3)	2(0)	1(1)
		4学年	8(2)	9(3)	1(0)
	生活科学部		30(21)	22(17)	37(29)
		1学年	12(12)	8(8)	28(25)
		2学年	3(2)	5(4)	1(1)
		3学年	5(5)	4(2)	5(2)
		4学年	9(2)	4(2)	5(1)

単位：人　カッコ内は単位取得者数
は大きな減少
は大きな増加

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

評価方法と評価割合ですが、これもお手元にあるシラバスから抜いたものです。期末試験と出席での総合評価を行っています。定期試験期間内に筆記試験を行って、自筆ノート、教科書の持込参照可で行っています。これは総合評価のうちの 80％の割合です。最終授業時に期末試験問題の一部を事前に公開して、あえて解説を実施しております。



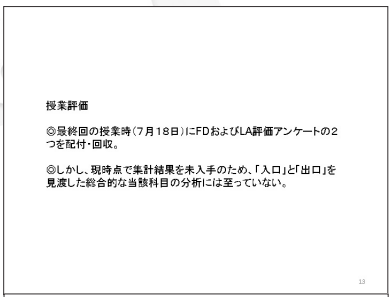
お手元のハンドアウトの最終ページの試験抜粋をご覧ください。試験は単答式のものが 20 題と記述式のものに大きく分かれておりまして、Ⅱの記述式の方は事前公開をしております。それからⅠの問題に関しても、こういう形式の問題であるというのは事前公表しています。Ⅱの記述式の問題を事前公表して解説もしているのは、きっちりと起承転結の論理構成をした文章を事前に作って試験に臨んでほしいということがありまして、あえて過剰な解説をしています。試験問題の内容の適切さに関してはご容赦ください。

スライドにあります表4は、過去3年度の成績評価の内訳です。成績評価は、相対評価は取らずに絶対評価です。各履修者の学生個々の達成度を判断するということで以前から評価を実施しておりますので、一定程度の分布はしておりますが、Aサイドに偏る成績の分布になっています。それからお茶大ではSという評価がありまして、それは経年的に対象者が変化するのですけれども、細かいことは省かせていただきます。

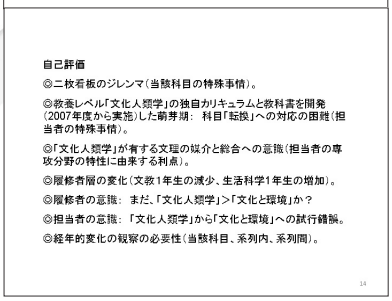
成績評価の分布で見ますと、「文化人類学」から「文化と環境」に変わって、Aの達成度を示す学生の数が増えました。平均点を計算しますとおよそ 75 点になっていますので、一般教養系の授業としては納得できる結果ではないかと私自身は理解しております。

これは、学期末試験の抜粋で、お手元にあるものです。

これは授業評価の結果です。最終回の授業時に二つのアンケートを配布、回収いたしました。「現時点での」と書いてありますのは、この資料を作った9月 16 日現在では、両アンケートともに集計結果が授業担当者に返されておりませんでしたので、入口と出口を見渡した総合的な授業評価結果を観察・分析する作業は不可能でした。従って、ここにお見せするのは、ある種の自己評価の結果とご理解ください。



まず、二枚看板のジレンマが非常に高かった。これは当該科目の特殊事情です。２番目、教養レベルの「文化人類学」の独自カリキュラムと教科書を開発して、2007 年度からこのお茶大でも実施しました。私　自身には新しいことを試していく萌芽期にあたりましたので、2008 年度からの科目「転換」への対応はある意味で困難さを伴いました。これは担当者の特殊事情です。

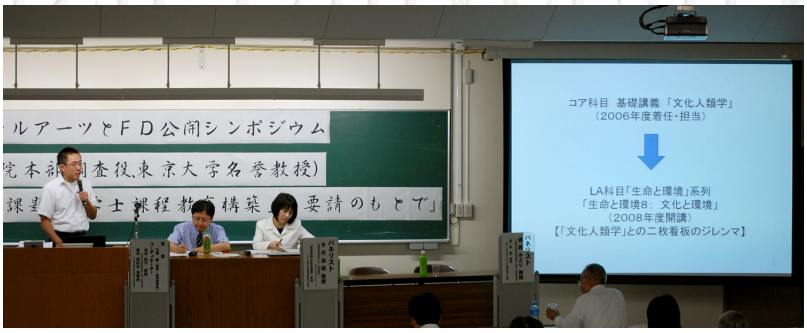


それから、もともと私が「文化と環境」という授業を構想するスタートラインが文化人類学という立場からであったという事情があります。文化人類学という分野自体が、もともと文理の媒介と総合という意識を持っております。具体的には、私自身が共同研究をここ３年間実施しているお相手の専門家の方々も、自然地理学、海洋工学、海洋生態学、リモートセンシング等の理系の方々です。彼らと一緒になって南太平洋の島における気候変動や、国土保全の問題を研究しております。そういう背景がありますので、こうした文理融合型のＬＡ科目においては、担当者の専攻分野の特性に由来する利点としてはたらいたのではないかと思っています。

それから、先ほど表でお見せしましたが、履修者層の変化がありました。文教育学部1年生の減少と生活科学1年の増加というのが、大きなポイントかと思います。

それから履修者の意識と担当者の意識。これは授業評価アンケートの集計結果をまだ目にしておりませんので明確なことは申せませんが、授業の前後等で学生と話しているときには、「文化人類学」＞「文化と環境」という意識がまだ強いように思いました。つまり、学生サイドの意識転換もまだまだ過渡的状況にあるのだと思います。担当者の意識としても、「文化人類学」から「文化と環境」へ、つまりディシプリン型からトピック型へという試行錯誤を繰り返しています。

ただし、こうしたことを考えるためには、今年度のＦＤ、ＬＡアンケートの集計結果を分析してみることが重要ですし、今後の経年的変化の観察の必要性も感じております。



以上ご清聴ありがとうございました。

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.